

選者 川口孤舟

投句・選句

今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 熊谷くにお 後藤とみ子 小早健介

在間千恵 佐藤ただしげ 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 豊田ゆたか 西澤國護

長谷見びん 福島正明 古川百合子 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也

山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお、梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章

山本三恵

【互選句】 ◎は孤舟選者の選 選者欄の○は選者の「天」

十二点 ◎渡月橋渡り切る間を初時雨

康敏

(○そ・紀・孤・く・五・堂・び・○允・正・啓・亜・け)

十一點 ◎蛇口より冬の出でけり朝支度

堂哉

(紀・くす・孤・健・と・千・た・清・百・昇・け)

九点 ◎山茶花や百通残す母の文

とみ子

(紀・千・孤・龍・康・隆・允・三・盛)

七点 ◎しろがねの芒が原を風わたる

くにお

(そ・孤・健・康・堂・允・昇)

七五三袴の下にスニーカー

千恵

(忠・清・○正・昇・規・天・盛)

凡庸に生きた二人や石蕨の花

盛雄

(紀・己・ゆ・隆・び・允・規)

六点 枯葉落ち岩肌映える立石寺

忠彦

(紀・健・た・ゆ・己・び)

◎一群の鴨や一氣に着水す

亜也

(そ・孤・健・堂・び・天)

五点 秋思とは寄せては返す波の音

孤舟

(○孝・龍・清・己・三)

神の旅良き風の日に発ちたまふ

とみ子

(紀・康・正・○規・○三)

立冬や飛行機雲の三筋行く

健介

(くす・と・國・百・亜)

声出して立ち上がる日や菊香る

ただしげ

(紀・清・啓・け・天)

驚一步われ一步追う冬干潟

びん

(五・孝・己・啓・○盛)

長き夜や小さき文字なる文庫本

啓子

(○健・千・康・び・正)

四点 冬晴れや被団協への平和賞

忠彦

(千・正・○昇・盛)

指で押し食べ頃を知るラフランス

全

(紀・堂・國・天)

秋簾外し時空の遠ざかる

孤舟

(くす・孝・啓・百)

亥の子餅あやふやなこと増ゆる年

五郎太

(と・ゆ・○己・正)

止り木を齧る鸚鵡や小六月

康敏

(紀・五・○と・亜)

到来の大根洗ふ味噌を練る
◎来し方は夢のまた夢秋の風
着飾りて花の笑顔や七五三
露天風呂冬夕焼に包まれて
月今宵間合い正しき海の音
浜の子の波乗板の冬仕舞

堂哉
ゆたか
昇
けい子
びん
全
(忠・千・國・百)
(紀・孤・清・規)
(そ・た・康・壱)
(紀・そ・龍・允)
(紀・く・○龍・昇)
(紀・た・隆・天)

二点

星飛ぶや誰にも言へぬ過去のあり
賑やかに三本締めや一の酉
聞こえ来る夕べの鐘や秋の風
炉開きやとぼけた織部を振出し
御在所の山を従え冬の雲
冬紅葉少し色添へ山の宿

孤舟
ただしげ
國護
壱也
けい子
全
(くす・忠・盛)
(忠・國・天)
(く・た・昇)
(千・け・三)
(健・允・び)
(紀・國・規)

二点

尾上松也

◎二枚目の革ジャンパーの楽屋入り
俳人に賞味期限や名の木散る
秋爽をたつぷり走るローカル線
紅葉狩遠く斜めに東山
紅き門太夫の墓に紅葉散る
◎急寒波衣も器具も泥縄に

紀久男
孤舟
全
五郎太
全
健介
千恵
とみ子
全
堂哉
ゆたか
康敏
正己
國護
びん
昇
啓子
全
天牛
盛雄
(忠・孤)
(くす・康)
(紀・く)
(ゆ・國)
(紀・○啓)
(紀・孤)
(紀・け)
(け・啓)
(○くす・孝)
(紀・規)
(紀・清)
(と・三)
(紀・堂)
(紀・と)
(紀・百)
(紀・壱)
(そ・三)
(紀・龍)
(○紀・五)

長き夜や新オーデイオで聞くクイーン
落葉ふむ猫の親子と前後ろ
鳴の群逢ふを約してわかれけり
駅前の今朝の早足冬に入る
秋蝶や日向日陰の羽づかい
宗祇水へ降りる石段雪虫
マンションにくしやみおじさん木霊する
ラフランス香り残して食べ収め
黄に病みし葉の捨てかねつ烏瓜
◎オーロラの天体ショーや息白し
国道の喧騒連れて北風来
秋の陽の佇む機関車焦がしをり
爺泣かす秋の長旅孫土産
連獅子に揺るる難波や新松子

一点

リハビリ通院の往きに帰りに千鳥鳴く
鯨見の歓声挙ぐる家族連れ

紀久男
全
(盛)
(忠)

(米国東海岸)

能登鯨の缶詰旨き妻の留守
Yを褒めたい勤労感謝の日
杖の媪歩みすばやき小春かな

全
忠彦
くにお
(壱)
(龍)
(孝)

にんまりと笑むトランプ氏冬に入る 五郎太 (隆)
 パレスチナ大使と話す十一月 全 (紀)
 お軸には又日に新たな文化の日 全 (己)
 稲架(はぎ)に掛け天日で干して旨い米 ただしげ (隆)
 雀等がさえずり遊ぶ刈田かな 全 (隆)
 月よりの風に吹かれて蜻蛉来る ゆたか (孝)
 秋庭の雑多この世の雑多かな 全 (百)
 竹林に秋風吹いて音となる 國護 (堂)
 月影や去りし友の声を聞き 全 (ゆ)
 小夜時雨少女の睫毛(まつげ)長きこと 正明 (く)
 ◎蠟燭や祈るすがたはクリスチャン 百合子 (孤)
 茶の花の朝の陽透けていや真白 啓子 (五)
 線路沿い芒踏み分け保線員 全 (び)
 しなやかに道の辺(べ)の花揺れて秋 規雄 (ゆ)
 風花やボジョレヌーボー連れて来し 盛雄 (五)
 秋の夜や踏切りの音遠くから 天牛 (た)

【句評・短評】

十二点句

渡月橋渡り切る間を初時雨

康敏

孤舟選者・・・京都での初時雨という一瞬の気象の変化に驚かされる。

五郎太さん・・・嵐山に紅葉狩に行かれたのか。浮世絵のようです。

堂哉さん・・・上五、中七に季語がぴったり！渡りきった近くの喫茶店に駆け込んだ記憶があります

亜也さん・・・「渡り切る間」という着想が秀逸。

十一点句

蛇口より冬の出でけり朝支度

堂哉

孤舟選者・・・急に冷え込んだ朝、水道水の冷たさに冬の到来を感じた。

とみ子さん・・・手の感覚で、冬を感じ取ったところが新鮮です。

千恵子さん・・・「手」という言葉を使わずに水の冷たさを表現されたところが良いですね。ただしげさん・・・冬の到来を感じさせ、中七の表現が秀逸。

百合子さん・・・蛇口の水の冷たさに思わず手を引っ込める朝、最近ほんとうに冷たい。

九点句

山茶花や百通残す母の文

とみ子

孤舟選者・・・母親との深い絆が感じられる。

康敏さん・・・筆まめなお母さまだ。季語から美しい文字だと感じられる。

隆さん・・・吾母も思いを綴った書き物を遺した。山茶花かも。

盛雄さん・・・貴重な遺品ですね。大切にしてください。

七点句

しろがねの芒が原を風わたる

くにお

孤舟選者・・・秋寂びの蕭条たる薄野。

康敏さん・・・風にうねる白銀に輝く芒原。景がよく見える句。
参考（しろがねの中に道あり芒原 鷹羽狩行）
堂哉さん・・・広々とした綺麗な景色が目には浮かびました

七五三袴の下にスニーカー

千恵

正明さん・・・よく分かります 記念写真は困りますね 面白い句ですね。
天牛さん・・・可愛いですね。大人も最近すニーカーが流行っているそうですね。老人はそこまで気が廻りません。

盛雄さん・・・微笑ましい佳句。

凡庸に生きた二人や石路の花

盛雄

ゆたかさん・・・気取りのないすっきりした調べです
隆さん・・・凡庸の評価はいかに。石路の花の黄色が眩しい。

六点句

枯葉落ち岩肌映える立石寺

忠彦

健介さん・・・芭蕉が詠んだのはその岩のあたりだった？
ただしげさん・芭蕉の句に対比して読むと面白い。
ゆたかさん・・・情景が目には浮かびます

一群の鴨や一気に着水す

亜也

孤舟選者・・・一斉に着水する鴨のおびたらしい鳴き声と羽音と水音に圧倒される。
堂哉さん・・・景色と水音がパーっと浮かびました！
天牛さん・・・鴨に限らず水鳥の習性でしょうが、このような光景はよく見かけます。特に水辺に暮らしていた頃は。

五点句

秋思とは寄せては返す波の音

孤舟

孝岳さん・・・寄せ返す波のしぐさの優しさを秋の思いにはせた表現が暖かくて感動しました。
龍平さん・・・波の音「ヴァレリー海浜の墓地」のセット(Seate)の波は荒々しいように思う。
先週賢島の海浜に立ったけどこちらは内湾も内湾その波の音は静かで穏やかそのものでもどちらか一人佇むと人生の幽玄を思い知らされます。

神の旅良き風の日に発ちたまふ

とみ子

康敏さん・・・すっきりした姿の良い句だ。
三恵さん・・・心地よい風を受けた一瞬のうちに神々が通りすぎたことを感じられましたか。あり得るかも。この感性が素敵です。

立冬や飛行機雲の三筋行く

健介

とみ子さん・・・「三筋行く」が白く輝く飛行機雲を、具体的にとらえて良いと思います。
百合子さん：冬になると嬉しい事の一つに景色が鮮明成ること、特に空を背景にした景色。私も飛行機雲をよく見上げます。

亜也さん・・・「三筋」の着眼がいい。

声出して立ち上がる日や菊香る

ただしげ

天牛さん・・・一つ一つの行動に「掛け声」をかけなければ動きだせないのは老化現象の一つでしょうね。

鷺一歩われ一歩追う冬干潟

びん

五郎太さん・・・白鷺が一羽。中七が上手です。

長き夜や小さき文字なる文庫本

啓子

健介さん・・・そうですね、文庫本の字は小さいですね。古い版は特に小さく、今では読み辛いですね

千恵さん・・・読書の秋です。昔買った文庫本を手に取りればいやに字が小さくて読みづら

い。年取ったな〜と感じたのですね。

康敏さん・・・文庫本の字が読み辛くなり、ハズキルーペを愛用するようになった。

中五下七は「小さき文字の文庫本」または「細かき文字の文庫本」では？

四点句

冬晴れや被団協への平和賞

忠彦

正明さん・・・佳作です。自分の中では次点の佳句。

昇さん・・・広島出身の私の一押し。ご苦労に報いる真の平和賞です。核兵器廃絶の前進を切に祈ります。

指で押し食べ頃を知るラフランス

忠彦

堂哉さん・・・スー・パーで指あたらしき傷のあるのをみたことがあると家内が面白がついていま

す。

天牛さん・・・友人がいなくなって、ラ・フランスと全く縁が切れました。昔が懐かしい。

秋簾外し時空の遠ざかる

孤舟

啓子さん・・・簾を取り込む季節になった。一つの区切り。そこにあった想いを留めたかったか、或いは解き放ちたかったか、何かどきりとする思いがしました。

百合子さん・・・最近は時の流れに感慨一入、老境に入った証明でしょうか。

亥の子餅あやふやなこと増ゆる年

五郎太

とみ子さん・・・時期的に、世相を振り返えつて、そう思われたのでしょうか。亥の子餅が効いて

います。

正己さん・・・痛感します。でも世の中あやふやあつてよきものでは？

ゆたかさん・・・政治家の資金の使い方のことでしょうか

止り木を齧る鸚鵡や小六月

康敏

五郎太さん・・・小春日和、ちよつと惚けた味があります。

とみ子さん・・・二月の春のような陽気に 鸚鵡が「？」と思ったのかなと、可笑しく想像します。

亜也さん・・・猫が爪を研ぐようなものですかね。手書きしたら、字画が多くて大変でした。

到来の大根洗ふ味噌を練る

堂哉

千恵さん・・・頂いた大根をどう料理して食べようかと弾む心を感じます。

百合子さん・・・熱々のふるふき大根をふうふうしながら食べる情景がすぐ浮かびました。

来し方は夢のまた夢秋の風

ゆたか

孤舟選者・・・今まで歩んできた道は、遠い彼方に霞んでしまった。

着飾りて花の笑顔や七五三

昇

ただしげさん・・・ほのぼのとしたものを感ずる。中七の表現が良い。

康敏さん・・・「花笑み」は春の季語だが、ここは可愛いお子さんの花のような笑顔だ。

参考（帯解けば笑顔がもどる七五三 片岡寿子）

亜也さん・・・いかにも微笑ましい光景でついつい頂いた次第。

月今宵間合い正しき海の音

びん

龍平さん・・・ 人世は常に大揺れ 自然は常に狂い無し。

浜の子の波乗板の冬仕舞

びん

ただしげさん・楽しかった夏の様子をなんとなく感じさせる。
隆さん・多摩川西六郷辺り。水上スキーをしている人を見た。滑り納めか。
天牛さん・若い人でも老人ぶっておられるのでしよう、波乗板が効いていますね。

三句句

星飛ぶや誰にも言へぬ過去のあり

孤舟

盛雄さん・人には話せない秘め事はあるものです。上五がいいですね。

賑やかに三本締めや一の酉

ただしげ

天牛さん・酉の市は明るい電灯の下でハッピー着た人たちが八巻きをしてやっています

ね!!昔はガス燈でした。

聞こえ来る夕べの鐘や秋の風

國護

ただしげさん・秋の静けさ、もの悲しさを感じさせる。

炉開きやとぼけた織部を振出に

亜也

千恵さん・茶事には詳しくありませんが炉開きはお祝いの席との事。それにしても出された振出が可愛らしくもないとぼけた色調の織部だったことがっかりされたのでしょうか？

二句句

尾上松也

二枚目の革ジャンパーの楽屋入り

紀久男

孤舟選者・歌舞伎役者の楽屋入りも和服姿と思っていた。

俳人に賞味期限や名の木散る

孤舟

康敏さん・俳人に賞味期限とは面白い。確かに若い頃の方が発想は豊かだろう。秋の深まりを強く感じる季語もマッチしている。

紅葉狩遠く斜めに東山

五郎太

ゆたかさん・情景が目に浮かびます

紅き門太夫の墓に紅葉散る

五郎太

啓子さん・雰囲気のある句、と思いましたら、京は鷹峰にある常照寺（元和元年創建・本阿弥光悦が土地を寄進）で詠まれた句と。当時芸に秀でて名を馳せた太夫、吉野太夫の墓があり、太夫が寛永5年に寄進した朱塗りの山門「吉野門」と共に紅葉も見事で観光スポットとなっているそう。醸し出される雰囲気に、成程俳句は、やはりそこに在って作句するものなのだと、改めて感じ入りました。

急寒波衣も器具も泥縄に

健介

孤舟選者・昨今の気候状況の乱れ・急変は、備える術もない。

落葉ふむ猫の親子と前後ろ

とみ子

啓子さん・こここで落葉が舞い散る季節。公園か歩道か、猫の親子がカサコンと落葉を踏みつつ歩いている。微笑ましく見ている作者の目が感じられます。

宗祇水へ降りる石段雪蛍

康敏

とみ子さん・郡上祭の頃に訪ねました。「降りる石段」から景がありありと浮かびます。
マンションにくしゃみおじさん木霊する 正己
堂哉さん・聞こえて来ました。それも立て続けに！

ラフランス香り残して食べ収め

國護

とみ子さん・・・最後のひとつをいただいても、いい香りは残っている。ほんとうに美味しいラフランスでしたね。

黄に病みし葉の捨てかねつ烏瓜

びん

百合子さん・・・私は病葉の美しさに今年も何枚か手に取りました。朽ちるってほんとうは美しいのかも。

オーロラの天体ショーや息白し

昇

孤舟選者・・・厳寒の北海道で、人工的に作られたオーロラ（もどき）が幻想的だった。

国道の喧騒連れて北風来

啓子

亜也さん・・・俳句のハードボイルド。

爺泣かす秋の長旅孫土産

天牛

龍平さん・・・月始め中学生孫が行き飛行機、帰り新幹線で東京に修学旅行。グループの人で赤門を見て来たと土産物に（赤門もち）何故この餅？聞かぬが花。泣かせますけど。

連獅子に揺るる難波や新松子

盛雄

五郎太さん・・・團十郎、新之助の親子共演でしょう。十一月句会として緑の松ぼっくりはどうかとも思いましたが、

一点

リハビリ通院の往きに帰りに千鳥鳴く

紀久男

盛雄さん・・・辛い日常に千鳥が応援してくれている。

能登鱒の缶詰旨き妻の留守

紀久男

亜也さん・・・留守時だからこそそのちよつとした愉楽。独り占めしたい訳ではないので念のため。

※句会席上で・・・能登鱒と云っても「鱒の缶詰」となると、季語としては微妙。

にんまりと笑むトランプ氏冬に入る

五郎太

隆さん・・・ぜひ一月20日の米大統領演説中継は御覧いただきました。前回は、いぶかしい顔をした歴代米大統領の面々が象徴的だった。しかし、確実にトランプは世界中にトランプ・クローンを増やした。

稲架（はぎ）に掛け天日で干して旨い米 ただしげ

隆さん・・・「稲架けや天の旨みを戴けり」でも。毎秋、目黒区の筑駒高校庭にお目見えする稲架け。太陽の恵みをもたらって嬉しい。

雀等がさえざり遊ぶ刈田かな

ただしげ

隆さん・・・「刈田をば遊び場にしてスズメかな」でも。気温上昇で「55年度以降急速にスズメが減少との調査結果あり。

※康敏さん・・・さえざり（旧仮名さへづり）は、小鳥が繁殖期に発する美しい鳴き声で春の季語。俳句では地鳴きと区別する必要がある。

参考（はればれと雀の遊ぶ刈田かな 石水明子）

秋庭の雑多この世の雑多かな

ゆたか

百合子さん・・・秋庭は確かに夏の名残りがあちらこちらに散乱。この世の雑多と結び付けるなんて！

竹林に秋風吹いて音となる

國護

堂哉さん・・・下五は平凡のようですが、良いなと感じました

月影や去りし友の声を聞き

國護

ゆたかさん・友を偲ぶ思いがたわってきます

※孤舟選者・・・「去りし」を「去りにし」として中七として整えると良いでしょう。

蠟燭や祈るすがたはクリスチャン

百合子

孤舟選者・・・カマキリが身構える様は、まさにクリスチャンが祈る姿そのまま。

茶の花の朝の陽透けていや真白

啓子

五郎太さん・・・この時期に咲くのですね。椿より木も花も葉も小ぶり、可憐です。

しなやかに道の辺(べ)の花揺れて秋

規雄

ゆたかさん・・・しなやかにという表現で雰囲気が伝わります

風花やボジョレヌーボー連れて来し

盛雄

五郎太さん・・・二月も半ば過ぎ、寒くなってきました。北山か六甲あたりから風花が流れて

来るのでしょうか。

秋の夜や踏切りの音遠くから

天牛

ただしげさん・田舎の秋の夜の静けさが思い起こされる。



【次回青葉会予定】

◇十二月十九日(木) 午後一時より四時半 句会(納会となります)

場所：三軒茶屋 しやれなあと 四階・シリウス

ご出句ご案内：句会ご出席の方は当季雑詠五句 ご投句二句 を目処としてお出してください。

ご出句切り日程：十二月十五日(日) 午前中

🌸 句会に続き、忘年懇親会を開催致します。午後五時～

場所 銀座アスター三軒茶屋賓館 「青葉会」で予約してあります。

◇令和七年一月の青葉会予定

一月二十三日(木) 午後一時より 場所：三軒茶屋 しやれなあと 六階・ビーンスの間

ご出句ご案内：句会ご出席の方は当季雑詠五句 ご投句の方は二句を目処にお出してください。

ご出句切り日程：令和七年 一月十九日(日) 午前中



【青葉会報】

一、 今年の十一月は、月が変わってもまだ夏日があると云った気候変動を実感する日があり、俳句を嗜んでいる私どもにとって、季節を先取りすることが感覚的に難しいながらの句会が続きました。この間、季語について各方面から注意喚起のお話もあったことから、そうした中でも、皆さまにはしっかりと、晩秋、冬の季語へと少しずつ気持ち切り替わっておいでになり、本来のこの時期に使われる美しい季語がちりばめられた句会となりました。ご出句は八十六句で、結果はご覧のように 十二点 康敏さん、十一點 堂哉さん、九点 とみ子さん が高得点となりました。

二、孤舟選者近詠

雲流れ外人墓地の秋薔薇
恋ふやうな諍ふやうな鹿のこゑ
山裾のバスの終点溪紅葉
座敷まで影伸ばしゐる柿簾
我もまた浮世の遊子鷹渡る

三、関係者近詠

お目出度うの声掛けかける七五三

隆

作者談… 5 日朝、館山、鶴谷八幡神社で親子三人づれの参詣客に出会いました。境内には誰れもい

なかった。特別な日を内心喜んでいる新しい服を着た男の子。すれ違いざまに、おめでとう

ございますと声を掛けた。有難う御座いますと返事があつた。人の子の成長を祈念した。

(了)

令和六年十一月十二日